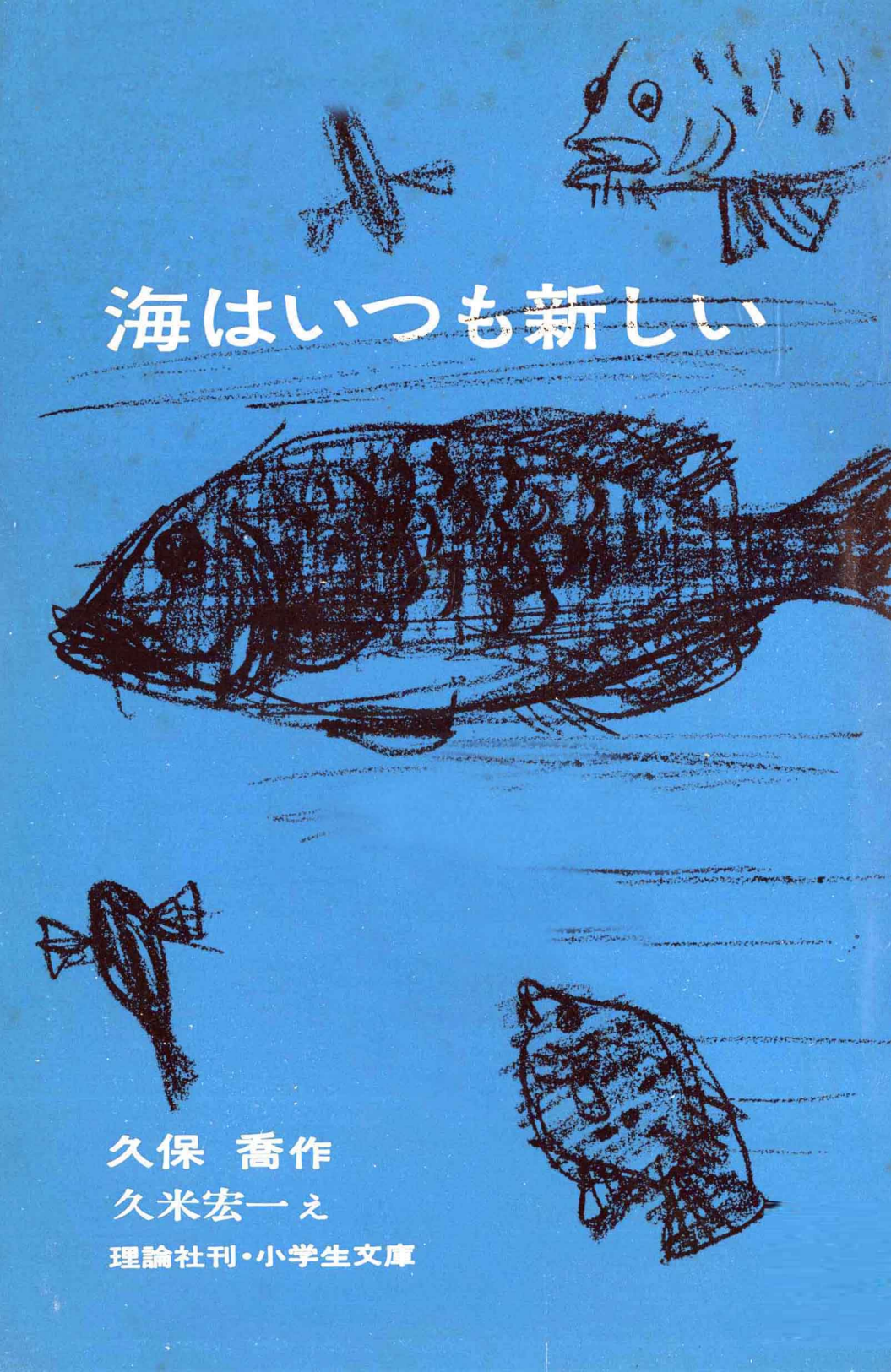
久保 喬 作 久米宏一 画

海はいつも新しい



海はいつも新しい

久保 喬作
久米宏一え

理論社刊・小学生文庫

913／海はいつも新しい

久保喬（くぼ・たかし）
理論社／1967年初版
216p／23cm／菊判

■小学生文庫■
海はいつも新しい
■作者■
©久保喬
■発行者■
小宮山量平
■発行所■
株式会社理論社
東京都千代田区神田神保町１—64
振替東京95736電話(294)6501(編)6504(営)
■発行■
1967年10月第１刷
■定価■
５６０円

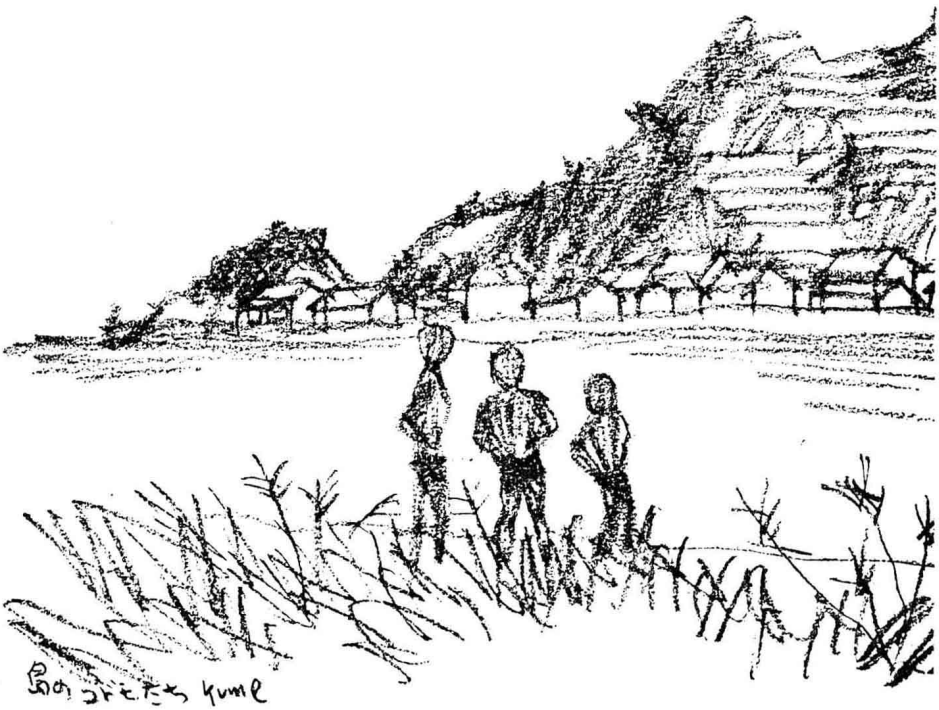
はじめに

岩の上で、少年が海へ向かって、大声で歌っている。潮の音にも風の音にも消えない声だ。

海は青く光っていて、その深い波の底から、海もまた少年を呼んでいるようだった。

海はふしぎだ、海はこわい、海はいつもおもしろい。海に生きる者だけが知っている、さまざまの海の話を——

このはだかの少年が語りはじめた。



海はいつも新しい

もくじ

はじめに　1

1　小舟のゴロウ　5

2　海のたまご　18

3　海はいつも新しい　36

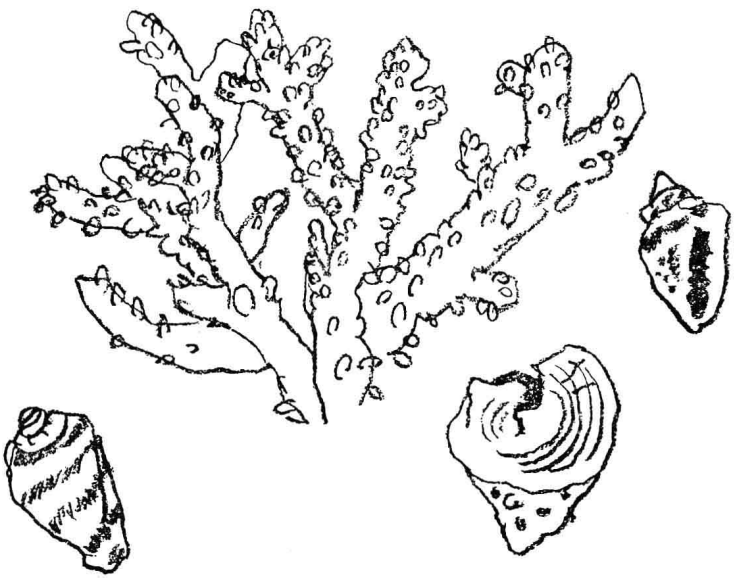
4　潮と人と魚　51

5　銀ダイの少女　78

6　あらしおのうた　96

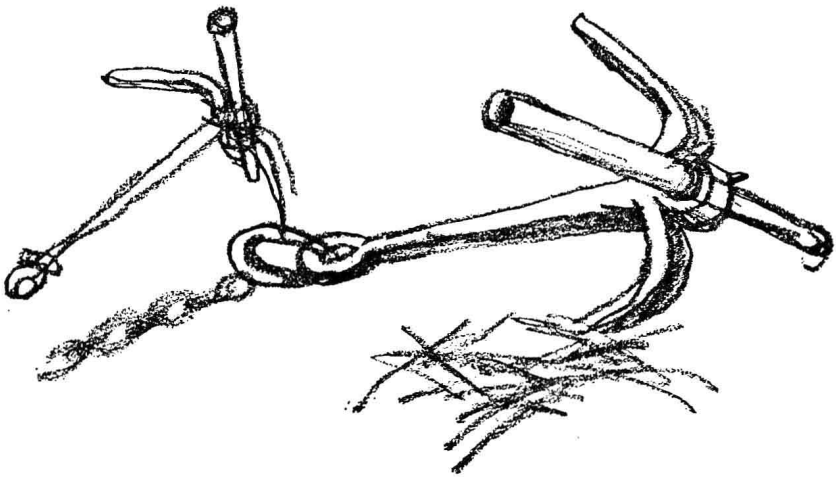
7　ネズミの島　111

8　わかい波　121



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

9 ニジの出る沖(おき) 136
10 イルカの飛(と)ぶ日 151
11 サカナの目だま 160
12 波が話した 166
13 七つの海と島の海 175
14 魚博士(うおはかせ) 188
あとがき 213
海のスケッチ 久米 宏一 203



本書をかざる大部分の絵は，久米さんが作者のふるさとを訪ねて描いたスケッチそのままです。とくに物語のさしえとして描かれたのは，ふちどりのある絵です。「海のにおいがいっぱいするように……」そんな思いをこめて，編集してみました。　　編集部

そうてい／さしえ
久米宏一

1 小舟のゴロウ

海をじっと見つめていると、波の中から小舟のゴロウが、ひょっくり出てきそうな気がする。

小舟らしくゆらゆらとゆれながら、へさきを立てて、こちらをむいて、

「じゃぶん、じゃぶん、太一よぉ、わしはほうら、ここにおるぞ。しけなんかにやられはせん。しずんだりするもんか。よう、太一。」

と、波の中から、ゴロウは太一をよんでいる。

おととといのしけの晩、浜のそまつな小屋のような太一の家をたたきつける雨風の音で、ふと、目をさました。

「えらいしけや――ああ、ゴロウはだいじょうぶかしらん。」

太一はあわててはねおきると、かっぱをかぶって、外へとび出していった。びしょぬれになりながら、くらやみの浜のはずれへかけていった。ぱっと、かいちゅう電燈の青い光で、てらしてみる

と、

「しもうた、やられた。」

つなぎ岩にかけてあった、ともづなが切れていた。

「ちきしょう、海め——。」

太一はむちゅうで、波と風があばれている海へむかって、なぎさの水へ足をふみ入れようとすると、滝のような波のしぶきがふってきた。

「あぶないっ。」

と、うしろから、おとなのうででひきもどされた。源おじかと思ったら、杉山先生が立っていた。

「太一、もどれ。」

と、おかあの声もした。おかあがさわいで、となりの家に下宿している先生も、いっしょに浜へ出てきたらしい。

「待て、太一、舟なんか惜しゅうても、代わりはできる——」

ふん、よそ者の先生は、何も知らん……と、太一は思う。

島の者には、舟はだいじな生き物なんだ。農村の馬や牛みたいなもんだと、だれかがいったが、いや、太一には、五郎丸はそれよりも、もっとだいじな、かけがえのないものだった。死んだおじいも、あの舟をあんなにかわいがっていた——。

あらしはいっそうつよくなり、かっぱもふきとばされそうだ。だが、太一は立ったまま、くらい

沖を見すかすようにながめつづける。
ふと、沖の波の中に流れていく小さなゴロウが見えるような気がしてきた。そこへ、ぐぐーっと、大きな波がうねりながら追いかけて、ああ、海ぼうずだ、海ぼうずのおばけめが波の中へ、ゴロウをひきずりこんでいく——。

＊＊

「この舟、ちっとも、わしのいうことをきかん。」
はじめてろをおろした時、いらいらして太一はさけんだ。まだ小さい太一のからだは、ろが大きくて長すぎて、ひっぱられていくようだ。舟のゴロウは、そういう太一をばかにして、わざと、へさきをそっぽへ向けたり、ぐらっとゆれて、太一を海へふりおとそうとしたりした。
「そら、おさえて、おさえて——」
と、そばで、おじいが太い声で、こぎかたをおしえてくれた。
「足をふんばれ——」
がくーんと、ろがともからはずれて、舟は笑うように、ひとりでぐるぐるとまわりだした。太一は思わず泣きべそをかいた。
そんなことを毎日やっているうちに、ゴロウと太一はだんだん気が合うようになった。
右へと、太一が思うまえに、ゴロウのへさきはもう右へ向いている。左へと、太一がろをひくま

えに、ゴロウは左へ向きかける。

ゴロウは、こぎ手の太一の心をちゃんと知っているようだった。

風のある日は、むずかしい横波をうまくかわし、前波は乗り切っていく。

「よっしゃ、ゴロウ。」

太一もそういうゴロウがすっかり気に入ってきて、沖からかえった時は、どんなにつかれていても、舟べりから舟板まで、潮水をぶっかけ、タワシでこすって洗ってやった。ヒゲだらけの舟虫がごそごそはいだしてくると、一ぴきのこらずつぶしてすてた。

「ゴロウは気だてのええ舟じゃ。からだもいつもきれいにしてやれ。」

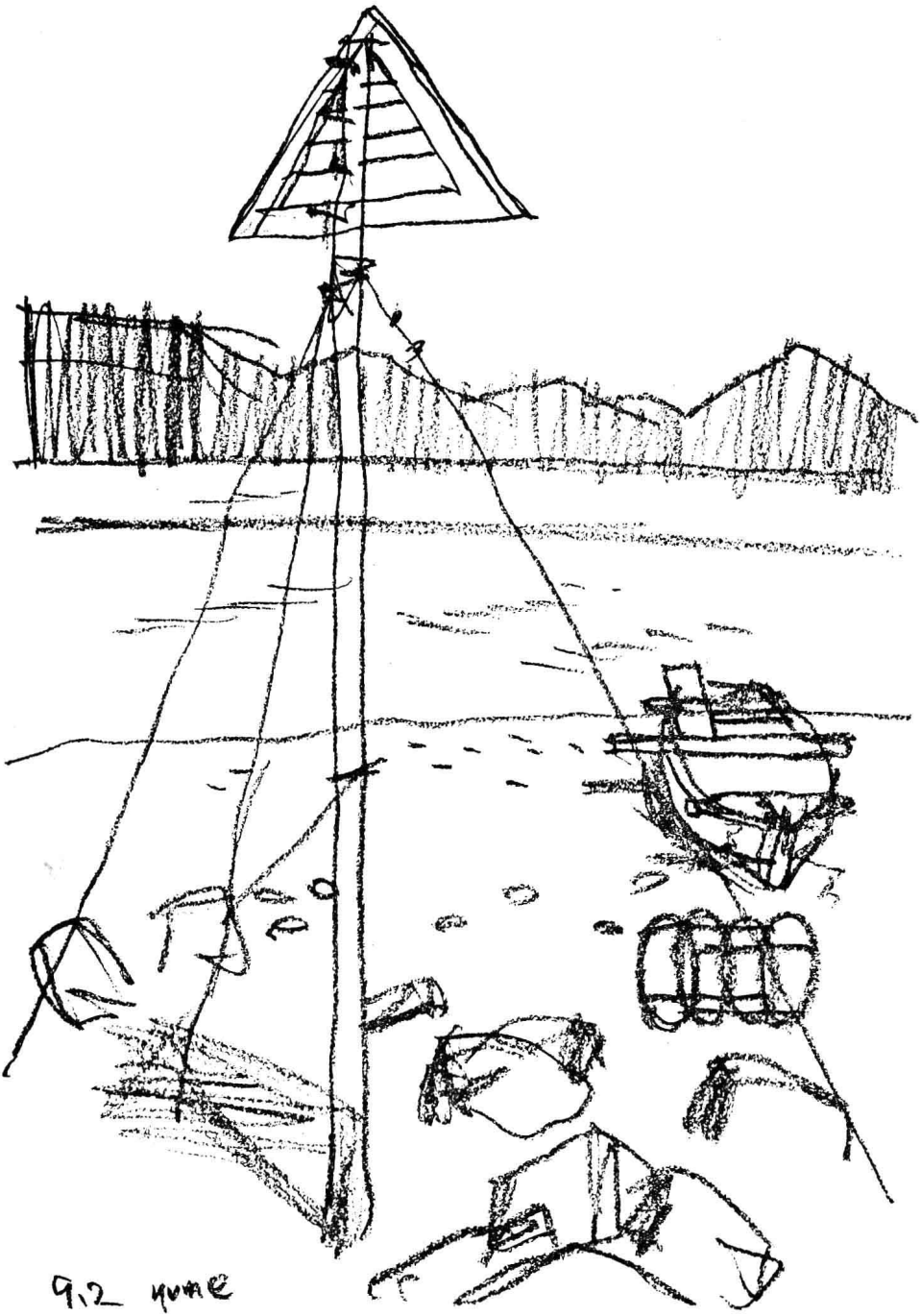
と、おじいはいった。そのおじいといっしょにゴロウにのっている時、一本づりのしごとのあいまなどに、おじいはいろんな話をした。

「わしは、海のことなら、自分の家の中のことよりも、くわしいぞ。海の色を見ただけで、サカナのむれが、どのへんを泳いでくるかも、ちゃんとわかる。目をつぶって、風の音を聞いただけでも、きょうは風がどの方角から吹きよるか、潮がどう流れよるかもわかるんじゃ。」

と、ひとりごとのようにいう。しわだらけで、あか黒いおじいの顔は、長いあいだ潮風にさらされた浜べの大きな岩の顔のように見える。

「漁師は、サカナの通る道やサカナの気だても知っとらんといけん。」タイやアジは、りこう者で、イカなんかはばかみたいだ……などと、サカナたちがまるで友だちのようにいう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com


9.2 nume

「わしのおじいは、島一番の漁師じゃ。」
太一が、浜でほかの子たちにじまんすると、
「なんじゃ、おまえのおじいなんか、もう時代おくれの漁師じゃ。無線や魚探（魚群探知機）をつんだ舟にのれん漁師はもうだめじゃ。」
と、網元の子の光夫がいった。太一はくやしい気がしたが、うちへかえってきてからも、そのことをおじいにはだまっていた。
そういえば、おとうも、とっくに一本づりに見きりをつけて、町へいき、建設会社の人夫になっているのだった。

＊＊＊

あれは、くもった海の上に白いこ雪がちらちらふっている日だった。
「漁師泣かせの冬がきたわい。」
と、おじいは、その朝でかけるまえにつぶやいていた。冬は天気のよい日がすくなく、一本づりの小舟で沖へ漁に出るのは、ひと月のうち、はんぶんぐらいで、それも、不漁の日のほうが多い。
「きょうは休もう。」
と、雪のふる外を見て、おじいはいった。ところが、朝の食事のとき、太一が、ふと、
「きょうは、わしのたんじょう日じゃ。」

と、いいだすと、
「ふうん、そうじゃったか。」
おじいは、きらっと目を光らせて、
「そんなら、たんじょう日のタイがいるのう。」
そういって立ちあがった。
「おじい、天気がわるいけん、きょうはいらん。」
太一もおかあも、あわててとめた。近所の人もそれをきいて、
「こんな日にタイなんかとれるもんか。沖へ出るのはあぶない。やめとけ。」
そういっても、おじいはきかずに、さっさとどうぐのじゅんびをした。日曜日なので、太一もいっしょに浜までいくと、
「きょうは、おまえはつれていけん。」
そういって、おじいはひとりで、ゴロウにのりこみ、沖へむかってこぎ出していった。
そのおじいが昼をすぎて、三時、四時ごろになっても、沖からもどってこなかった。
「どうしたんかな。」
太一はふたたび浜へいって、うろうろした。浜のはずれに立っている石碑が、ふと、目についた。
「あれは、もうずっとむかしのこと。冬の日に、沖へいったアミ船が難船して、のっとった十三人の漁師がみんな死んでしもうた。それをお寺のぼうさんがかなしんで、俳句によんで、あの石碑を

たてたんじゃ。」

と、村の者はいっている。

十三人ひとりのこらず冬の海

そういう俳句と、死んだ漁師十三人の名前がほってあるのだった。

「なに、おじいはだいじょうぶじゃ。」

と、太一はくびをよこにふった。

波の上のこ雪の白さが目だつほど、海が暮れかけてきた。そのとき、入江のみさきのあたりに、小さい舟があらわれた。

「ああ、ゴロウ——」

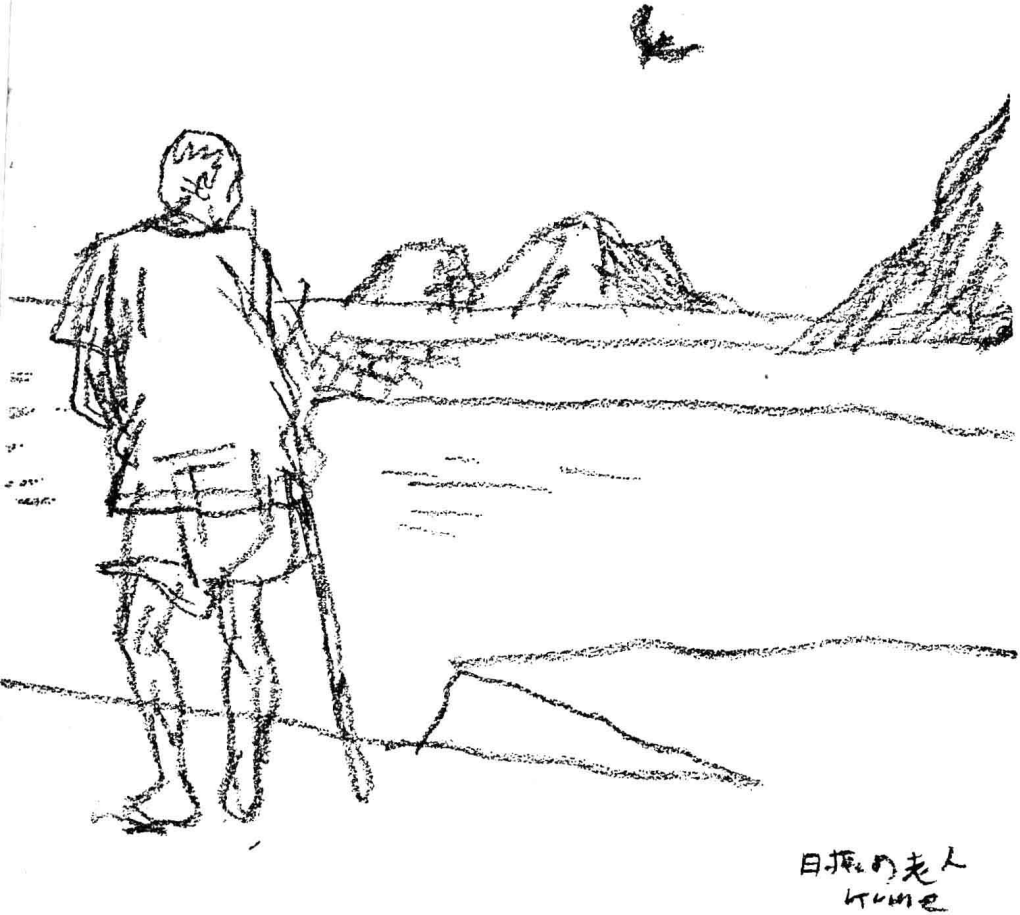
どんなに遠くにいても、自分のうちの舟はすぐわかる。やがて、ぐいぐい、ろをおすおじいのすがたも見えて、ゴロウは浜へもどってきた。

「おじい、どうじゃった。」

おじいは、舟の上で、右手のタモアミをふってみせた。五十センチもありそうな大きなタイが一ぴき、はいっていた。

「こいつを半日かかってさがした。こんな日は、海の底も寒いけん、サカナはみんな、岩の下にはいっとる。そいつをおびき出してつるのはむずかしいんじゃ。」

「ふうん、こんな日に、ようつってきたのう。」



と、浜へ出てきた近所の人たちもほめた。

――おじいは、やっぱり島一番の漁師じゃ――、と太一は思った。

「さあ、太一のたんじょう日のサカナがでけた。」

おじいは大ダイのエラをつかんで、太一にわたした。

舟の上は、へさきからともまで、まっ白に雪がつもって、まるでいつものゴロウとはちがう舟になっている。その白い雪の上で、赤いタイの色がいっそう美しくさえて見えた。

＊＊＊

朝は潮の香りがつよい。

浜のはずれの天ぐ岩のてっぺんに、太一はひとりで立っていた。ここで海を見ていると、いろいろな思い出がうかんでくる。

入江で、信のうちのてんまときょうそうをしたときに、ゴロウがすっと波を切って追いぬいたが、

「なんじゃ、ボロ舟。」

と、信にいわれて、かっとなった太一は、むちゅうでむこうの舟にぶちあてていた。

しょうとつした舟べりが、ガジリッと、いやな音がして、ゴロウにけがをさせてしまった。

あのきずは、いつまでもゴロウのからだにのこっていた。太一はそれを見るたびに、くやしい気がした。

タコつぼをあげていたとき、ふいに、タコにスミをふかれた。あわてて、つぼをどすんとおとして、舟板が一枚われた。おこったおじいの大きな手のひらが、太一のほほにとんできた。

だが、あれがおじいにしかられたさいごだった。あれから、四、五日たってのち、夜なかにとつぜん、のういっけつでおじいは死んだ。

「すきなさけで死んだのじゃ。」

と、そう式にかえってきたおとうがいった。そのおとうは、すぐにまた町の飯場へいってしまった。

それからのち、太一はときどき、ひとりきりでゴロウにのって沖へ出た。一本づりのまねをしながら、広い海のまん中にゴロウとふたりきりでいると、つまらなくなってきて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com